

〔論文〕

現代社会の不道德な現状を打開する教育の探求 — 明治の教育改革を補完する平成の改革断行を願って —

稲井 廣吉*

— 目 次 —

1. 研究意図
 2. 日本の社会の不道德な現状とその根本原因
 3. 道徳の頹廃はローマ大帝国さえ滅亡させた
 4. 教育的打開の根本方策
 5. 平成の教育改革と香川の教育的基盤
- あとがき

キーワード：稲作農村社会から工業化、都市化社会へ変質、
集団主義的タテの道徳から隣人愛的ヨコの道徳へ変革の要

1. 研究意図

日本の一年間の社会の世相が「偽」の一字で表現されたほど、日本の社会はモラルを欠如した社会に成り果てている。あの偉大だったローマ帝国でさえ、道徳の低下が根本原因となって滅亡したことを思うとき、愛する日本の将来を考え、暗い気持ちになるのは筆者だけであろうか。

なんとかその根本原因を発見して、愛する日本国の衰退を未然に防ぎたいと思い、高齢の身を顧みずわが人生最後の論文として取り組んだのが、本稿である。

* Hiroyoshi INAI 香川大学名誉教授、元四国学院大学教授、教育学博士

筆者は先に四国学院『論集』121号において「教育危機打開の方策に関する一考察」を、次いで124号では「現代工業社会が要求する道徳教育—砂漠風土に発生したキリスト教の考察から—」を発表した。今回の研究はこれら二つの研究をふまえて、日本社会の不道徳の根本原因を探求し、教育的打開の方策を考察しようとしたものである。

2. 日本の社会の不道徳な現状とその根本原因

(1) 「偽」が横行している社会とその根本原因

近年、年末の年中行事として、経過した一年間の世相の特色を反省して一つの漢字で表す「今年の漢字」という年中行事が行われている。平成19年（2007年）末に選ばれた漢字は驚いたことに「偽」であった。マンションやホテル建築における耐震強度偽装の事件を始めとして、江戸時代から続いている有名老舗の菓子会社が消費期限や賞味期限の切れた材料を使っていたり、原料の産地を偽っていた会社が次々と露見したりして、それに伴う陳謝の会見が毎日のようにテレビニュースに流れた。四国新聞の「一日一言」には、こうした異常な社会現象について次のように述べていた。

「事態を收拾させるための会見が却って状態を悪化させた例もずいぶんあったように思う。創業者の父に申し訳ないと机に頭をこすりつけたのは、高級料亭、船場吉兆のおかみ。謝るならば、偽物だと知らずに買わされた人に対してなのにそれを理解していなかった」（「一日一言」四国新聞、2007年12月31日付）。

世間的常識に富んでいるはずの料亭のおかみが、どうしてこのように謝る対象までも間違えたのであろうか。その根本原因は、創業者の父が働いていた日本の稲作農業村落社会の時代は既に終わってしまっていて、今日では全く異種の西欧的工業化社会にまで変質を遂げているのに、おかみはその点に気づかないで、依然として稲作農業村落社会時代の古い価値観や道徳観念でものごとに対処しているためであると思われる。この間の事情を次の表「稲作農業社会と工業化社会の比較表」を用いて詳しく説明することにしたい。

表 稲作農業社会と工業化社会の比較表

	稲作農業社会	工業化社会
基幹産業	○稲作農業（土地定着）	○遊牧業（土地移動）
風土	○高温湿潤のモンスーン風土	○乾燥の砂漠的風土
社会の類型	○集団主義社会（静止社会） （固定社会）	○個人主義社会（動的社会） （競争社会）
重視する教育	○情意の教育	○知育
重視する道徳	○儒教的道徳（世俗的） （集団主義的） ・ 忠孝等タテの道徳 ・ 恥の道徳	○キリスト教的道徳（宗教的） （個人主義的） ・ 隣人愛等ヨコの道徳 ・ 罪の道徳

日本は風土的には高温多湿のモンスーン風土圏に属しているのので、この料亭の創業者の父の時代も稲作農耕を基幹産業とする稲作農耕社会であったはずである。しかし第二次大戦後工業化・都市化が急速に進行して日本が経済大国への道を歩むと共に、日本の社会は従来の稲作農耕社会から西欧的な工業化社会へと急速に変質してきた。

一定の土地に定着して一所懸命に生活を営んだ農村社会では、村に住む血縁地縁の集団が至上の価値・終極の目的と考えられる集団主義の社会的性格を持つてくる。そこで支配する道徳もまた忠孝のような儒教的なタテの集団主義の道徳である。料亭の経営に失敗したおかみが、創業者であり血縁集団の長でもあった父に対して先ず丁重にお詫びしたことは、日本の社会が今日も稲作農村社会のままであるなら別に問題はないであろう。村落社会では村の血縁・地縁集団以外の人びとに対しては、敵視するか無関心であるかのいずれかであるのが一般であるからである。

偽物だと知らずに買った人に対して謝らなかつたおかみの態度が強く非難される理由は、日本の社会が戦後の工業化・都市化の急速な進行によって稲作農耕社会から西欧的な工業化社会に既に変質しており、上記の表でも明らかなように社

会の実質は、従来の集団主義社会から西欧的個人主義社会に変化して、至上の価値・終極の目的を持つものは集団から個人へと移行すると共に、重視される道徳も儒教的忠孝のタテの道徳からキリスト教的隣人愛のヨコの道徳へ、そして世俗的な恥の道徳から宗教的な罪の道徳へと変化してきていることを全く理解できていないことによるものと考えられる。今日の工業化社会・個人主義的社会の立場から考察すると、おかみが偽物だと知らずに買わされた人々たちに対して謝らないのは、ヨコの隣人愛の道徳を無視した罪深い不道徳な行為であるといえる。

以上、日本の社会と価値観や道徳性の変化について述べたが、日本国民の現状では、おかみのようにまだ稲作農村社会時代の古い価値観や道徳観を固守している者が多いのではなかろうか。

(2) 無差別殺傷事件に脅える社会とその根本原因

(a) 無差別殺傷事件に脅える社会

「偽」の年と呼ばれた平成19年(2007)が終わり、新しい希望のもとに平成20年(2008)を迎えて間もない3月になってから、異常な青少年たちによって日本社会の不道徳性をさらに象徴するような無差別殺傷事件が相次いで発生した。

① 茨城殺傷事件

その一つは茨城殺傷事件である。報道によると、24歳の無職青年が自分の地域社会に住む面識のない72歳の老人を殺害した後、逃走、破滅願望を心に抱いて逃走先の東京秋葉原駅から自宅最寄りの荒川駅まで戻ってきて、改札口を素通りした後、駅構内と通路などで男女8人に対して無差別殺傷事件を引き起こした。自宅に置いていた携帯電話のメールには「わたしは正義、支配者」等と書かれており、自分を神のような存在に例えているという。全く自己中心の利己主義者である。高校時代から家族と疎遠になり、家族と一緒に食卓を囲むこともなく、互いの携帯電話の番号も知らなかった。県警は、こうした家族との距離や内向的な性格から孤独感を募らせたことも事件の背景となっていると見ているようである。

② 岡山駅突き落とし事件

その二つは岡山駅突き落とし事件である。報道によると、高校を卒業したばかりの18歳の少年が家出して行くあてもなく、私鉄やJRを使って午後7時頃岡山

駅に到着、「人を刺そう」と思って駅周辺をうろついたが決心がつかず、駅の構内に戻って午後11時過ぎ、乗車のためにホームで2列に並んで待っていた乗客の先頭にいた38歳の岡山県職員を線路に突き落として死亡させた事件である。「人を殺せば刑務所に行ける。誰でもよかった」と、逮捕されたあと無差別殺人であったことを告白している。「父に見放された」自分の絶望感を癒やすために関係のない人を殺害したのであるから、自己中心の利己主義者と言わざるを得ない。高校時代の成績は優秀で大学進学を強く希望していたが家庭の経済事情から果たせず、就職をせざるを得ない状態にいながらも翌年の進学を目指しており、事件の前日も就職活動をしていたという。しかし仕事が見つからず、心理的に追い詰められていた。少年の一家は阪神大震災で被災し、尼崎市から大阪府に転居、その転居先の新しい小中学校でいじめを受けており、中学時代はずっと一人で机に座っていたということである。

③ 秋葉原無差別殺傷事件

その三つは6月8日に発生した東京秋葉原無差別殺傷事件である。25歳の青年がサイトで犯行を予告、トラックと殺傷能力の高いナイフで人混みに突入し、7人の命を奪い10人に怪我を負わせ、歩行者天国は血染めと化した。「殺傷の相手は誰でもよかった」という無差別殺傷事件であった。報道によると、小中学校時代は成績は学年のトップクラスのおとなしい生徒であった。県内屈指の進学校の高校に進学したが、入学後の成績は振るわなかった。恐らく両親との不和や本人の孤独感等が影響したものと言われている。高校時代から自動車に興味を持っていて卒業と共に自動車短大に進学、卒業と同時に静岡県の自動車部品工場で働く派遣社員となった。

(b) 無差別殺傷事件の根本原因

上述のように、無差別殺傷事件が頻発している根本的原因は、「偽」的事件の多発の場合と同様に、第二次大戦後における日本の社会の都市化・工業化の急速な進展によって、これまで村落に定住していた稲作農業民を中心とした集団主義の静止的社会が、地域に束縛されずに広い社会で自由に活動する個人主義・自由主義の動的な工業化社会にまで変質してきたことが根本原因である。前に掲げた表「稲作農業社会と工業化社会の比較表」で明らかのように、新しい工業化社

会が日本古来の稲作農業社会と異なる重要なポイントの一つは、後者が集団を至上の価値あるもの・人生終極の目的と考えたのに対して、前者は反対に個人を至上の価値・終極の目的として重視する点である。

今日の社会では、第二次大戦後の工業化・都市化の急速な進行によってこれまで人びとが住み着いていた稲作農村的集団社会が急速に解体に向かうと共に、忠孝のような古いタテの集団的道德も力を失ってきている。現代社会を生きる青少年たちが、戦後の工業化社会における自由なヒューマニズムの思潮や文化の中で身につけたものは、地域集団に束縛されない自己中心主義の生き方である。したがって彼らは、古いタテの集団的道德はもちろんのこと、新しい工業化社会で生活するための西欧的个人主義の道德も全く身につけていない状態である。上述した青少年たちの無差別殺傷事件は、いずれもこの自己中心の生き方に発しているといっても過言ではないと思われる。例えば既述の茨城殺傷事件の青年は、携帯電話のメールに「わたしは正義、支配者」等と自分を神のような存在に例えており、高校時代から家族と疎遠な生活をしていたといわれている。

さらにこうした自己中心の考え方は、青少年が日頃生活している集団主義の地域社会を離れて、工業化社会の象徴である電車や自動車に乗ってから強まっていることは注目に値するところである。集団主義社会に強い反抗心を抱きながらも、新しい欧米的工業化社会の新しい道德をまだ身につけていない青少年たちは、工業化社会の個人本位で自由な風潮に憧れ、個人の自由を集団的に束縛する農村社会の打破を目指したものと思われる。こうした態度が最もよく表れたのは、JR岡山駅突き落とし事件である。

犯人の少年が、駅のホームで電車に乗車のため2列に並んで待っていた集団の先頭にたまたまいた中年の岡山県職員を線路に突き落としたのは、彼にはこの列が稲作農村社会の集団主義道德の象徴のごとくに見えたためではなかろうか。在学中に集団的いじめを受けて苦しんだ経験を持つ彼にとっては、集団主義に対する憎悪心は、ひときわ強力であったと思われるからである。こうした点から考えると、今日最も急を要することは、農村社会の集団主義道德に代わる工業化社会の道德を一日も早く普及させることである。

西欧諸国では中世以来のキリスト教による道德教育によって、18世紀末から産業革命を通じて到来した工業化社会の生活を乗り切ってきたのであった。キリス

ト教ではキリストご自身がその全生涯を通じて身をもって神と人間を愛され神に仕えたように、隣人愛がキリスト教の道德の中心である。しかもキリスト教への信仰心を持つ者は、いずれもキリスト・イエスに結ばれて神の子である。したがってキリスト教が普及している社会では、無差別殺人は起こり難いのである。

キリスト教の宗教的来世思想も、こうした無差別殺人事件を防止するうえで有効であると思われる。岡山駅突き落とし事件の少年が逮捕された直後、「人を殺せば刑務所に行ける。誰でもよかった」と述べている。その意味するところは明確ではないが、筆者は次のように解釈している次第である。本人が恐れているのは人間的な恥の道德であり、殺人を実行後最も恐れているのは、社会からの非難・叱責である。刑務所に入れば、そうした社会からの非難の声から逃れられることを意味しているのではなかろうか。これに対してキリスト教による罪の道德教育の場合では、現世よりも来世思想が中核となっているので、人を殺した場合は死後の来世の世界でも永遠に苦しい目に遭わねばならないという厳しい教えである。したがってこの種の無差別殺人事件に対する抑止力は、極めて大きいといわねばならないのである。

3. 道德の頽廃はローマ大帝国さえ滅亡させた

ローマは紀元前3世紀から紀元後4世紀まで約700年間繁栄した大帝国であった。共和制時代は建国の精神に満たされた質実剛健な教育が家庭教育を中心に行われた。しかし後半になって、征服したギリシャからギリシャ的ヒューマニズムの文化が採り入れられるようになってからは、学校教育がローマの教育の中心的役割を担うようになっていった。この頃の教育に最も大きな影響を与えたのは、キケロ：Cicero (B. C. 106~43) であった。彼はギリシャ的教養に優れ、大政治家・大雄弁家であったばかりでなく、ローマ第一の思想家・名文家であった。彼の教育思想はギリシャ的教養を基盤としているため、ギリシャ的ヒューマニズム(人文主義)を基調としている。人生究極の目的を幸福におき、幸福にいたる道は道德であり、有徳の人を教育するには哲学を研究し理性を啓培しなければならないとする。したがって教育上最も重要なことは理性(知性)を磨くことであって、そうすることによって道德も自ずから培われてくるという教育観に立っ

た。

ローマはB. C. 31年から政治体制が変革して帝政時代を迎え、約500年間を経過して滅亡した。この帝政時代の教育の概要は次の通りである。この時代はローマの黄金時代で、文化が爛熟した反面、教育は墮落し、奢侈・享楽・残忍の風潮が支配するようになり道徳的頹廢を招くようになった。利己主義が横行すると共に家庭教育や社会教育が頹廢し、同時に知的教育が異常に発達して知育偏重・徳育軽視の風潮が強まっていった。ギリシャのヒューマニズムの教育と並んで西洋教育の二大支柱の一つとなっているキリスト教教育は中世から行われてきたもので、古代のローマ時代にはまだ行われていなかった。したがってローマの教育はギリシャ的ヒューマニズムオンリーの教育であったことは注目すべきところである。

4. 教育的打開の根本方策

(1) キリスト教による道徳教育推進がカギ

これまでの説明で明らかなように、無差別殺傷事件や産地偽装事件のような不道徳な犯罪を防いで、愛する日本国がローマ帝国の轍を踏まないためには、農村社会を規制してきた世俗的で集団主義の古いタテの道徳では不可能であって、今日の新しい工業社会を規制することのできるキリスト教独自の個人主義のヨコの道徳に依存しなければならない。工業の先進国である欧米諸国はいずれもキリスト教を奉じてきたばかりでなく、第二次大戦後には世界戦争の再発防止を願って、国連のユネスコ宣言にあるように「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」として、第二次世界戦争の勃発を教育的に反省し、世界共通の目標としての「^{いつく}慈しみの精神」を設定したのである。

この教育目標からみても、世界が今日要求している教育は道徳教育であり、しかも宗教的性格を持った道徳教育であることがわかるのである。敵をも許す隣人愛を骨子としているキリスト教による道徳教育は、上述のユネスコの教育目的に全く一致しているといえるのである。ユネスコは1965年には、道徳教育実施の方法として生涯教育（生涯学習）を提唱した。この点もキリスト教国の人びとは、

すでに古くから実施していることである。すなわち幼少時にはクリスチャンホームの中で育ち、在学時代はキリスト教を学校教育のカリキュラムの必須の領域として学習し、社会に出てからは日曜日には教会に出席して過ごし一週間の社会生活を聖書に照らして反省するとともに、次の一週間に対する行動の指針を聖句に従って立てるといふ生活を続ける。そして退職後は、召天にそなえて教会に対する奉仕活動を強めるとともに善行の実践に励む。これがキリスト教国の人びとの一般的な風習であると言われている。こうした点からキリスト教国では、国民全体がキリスト教的隣人愛のヨコの道徳を生涯学習していることになるので、ユネスコが提唱する生涯教育の目標も毎日の生活において自然に達成できるようになっている。

以上のように見てくるとキリスト教による道徳教育は、国内の不道德な事件の根本的解決をもたらすばかりでなく、ユネスコが提唱する世界の教育目的（慈しむ心の育成）と教育方法（生涯教育）をも達成できる点から考えて、キリスト教による道徳教育が21世紀の世界史において、日本が興隆するか衰退するかのカギとなっているようにさえ思われるのである。

(2) 平成の教育改革断行の時期

(a) キリスト教の道徳教育の普及

これまでに述べたところから明らかなように、今日の日本の教育がキリスト教という重要な教育を欠いた、ヒューマンイズムの教育オンリーの教育となっている根本原因は、明治の教育改革に起因しているといえる。明治5年（1872）の学制改革において行われた明治の教育改革でモデルとした西欧の教育は、ヒューマンイズムの教育とキリスト教の教育との二つの教育支柱から成り立っていた。ただキリスト教の教育の実施のしかたは国によって違っていたのである。英独方式では公立学校で行っていたのに対して、フランス方式では、ローマンカトリックとプロテスタントが厳しく対立しているという国内事情から、公立学校においてはキリスト教による道徳教育は行わず、修身と公民の教科によって世俗的な知識の道徳教育を行っていたのである。このように日本がモデルとした西欧の教育にも、公立学校においてキリスト教による道徳教育を行うか否かによって、英独方式と

フランス方式の2種類があり、日本は英独方式を捨ててフランス方式を採用した。ここで特に注意すべきことは、フランス方式では公立学校でキリスト教の教育はやらないかわりに、水曜日に学校を休日にしてそれぞれの教会に出席させ、教会でキリスト教の教育を受けさせることを義務づける制度となっていたのである。明治の教育改革では上述のようにフランス方式を採用したが、周知のとおり日本の学校の修身科ではフランスとは違って、キリスト教の道德教育とは無縁の儒教的道德教育のみが行われてきたのであった。

以上から明らかなように、日本の今日の教育において重要なキリスト教的道德教育が欠如しているのは、明治の教育改革に起因している。詳しく言えば、明治の教育改革ではフランス方式を採用しながら、重要なキリスト教の道德教育に関しては、フランスとは違ってキリスト教による教育を意図的に排除し、世俗的な道德教育を実施したのが根本原因となっている。断っておくが、このために明治の教育改革を断行した当時の偉大な先覚者たちを非難するのは大きな誤りであると思う。なぜなら明治の当時はもちろんのこと、第二次大戦後経済成長を遂げるまでは、日本の社会は稲作農業本位の集団的社会であったので、儒教的タテの道德がマッチしていたからである。われわれが今日、平成の教育改革を急ぐのは、日本の社会が既に西欧と同質な工業化都市化社会となっているからである。このために平成の今日の道德教育は、西欧と同様にキリスト教の教育に依存するのが当然のこととなってくるのである。西欧の近世の教育は、一貫して「西欧近代教育の父」と呼ばれている17世紀の偉大な教育学者コメニウス：J. A. Comeniusの教育目的論に依拠している。彼は西欧の教育目的について、次のように主張している。

「人生の究極の目的は、死後天国に行って永遠の幸福を神から受けることである。しかし死後天国に行くには、現世において完全な生活を送る以外にない。二つの教育はその準備を行うためのものである。ヒューマニズムの教育によって知識を開発して科学・技術・文化の進歩を図ることは、現世の生活を快適にしてくれる反面人間性をむしばみ、人類の生存をおびやかす結果を招来する危険性もある。このためキリスト教の教育によって神に対する信仰心を培って神の似姿となり、自己と社会と文化を道徳的に支配することが肝要である」（教師養成研究会『近代教育史』による）。

西欧ではコメニウスのこうした教育説に基づいて、教育目的としてはヒューマニズムの教育（知育）とキリスト教の教育（徳育）の二本の柱を立て、それに向かって人間形成に努めているのである。西欧社会と同質の知的で個人本位の工業化都市化社会に変化してきている日本においても、欧米諸国と同様に、コメニウスの教育目的の設定が緊急の要事となっているといえるのではなかろうか。

コメニウスの教育説に照らすと、明治の教育改革はキリスト教の道德教育を欠いており、ここに今日の日本社会の不道德性の根本原因があることは明白であって、正に筆者が、明治の教育改革を補充し発展させる平成の教育改革を要望する所以もこの点にあるのである。

(b) ヒューマニズムの教育（知育）の一層の推進

本稿は日本の社会の不道德な現状を教育的に矯正することを主題としている関係から、キリスト教による道德教育の推進を中心に詳述してきたが、コメニウスは既述のとおりヒューマニズムの教育（知育）についても西欧教育のいま一つの支柱として重視している。明治の教育改革は、幸いにも世界の先進国が驚嘆するほどこの知育に力を注いだお陰で、第二次大戦の敗戦によって焦土と化した地に工場が続々と建設されて、今日では自動車の生産においては本場のアメリカを凌駕して、世界第二の経済大国にまで発展することができたのであった。現在では、明治の教育改革の際にモデルとした英・独・仏に劣らない工業化都市化社会から成る近代国家にまで成長しており、これもひとえにヒューマニズムの教育を中心とした明治の教育改革のお陰であるといえるのである。

知育を建前とするヒューマニズムの教育は、今回の平成の教育改革においても極めて重要で、明治の教育改革に劣るといえることはない。否、むしろ今日では、明治の教育改革の時よりも世界的に遙かに重要度を増しているとさえいえるのである。その直接の動機となった出来事は、1957年のソヴィエトによるスプートニクの打ち上げの成功である。ソヴィエトにおける科学技術の発達にアメリカ始め世界の先進国は驚きあわてたのであった。このスプートニク・ショックを機として、世界各国は科学と技術の知育（ヒューマニズムの教育）に力を入れるようになり、教育爆発の時代が到来しているのが、世界の今日の現状である。したがってヒューマニズムの教育は、明治の教育改革の頃と比べて今日では、世界的に遙

かに重要となってきたといえるのである。知的教育改革の内容についても違って、明治のヒューマニズムの教育が地球中心の科学的研究開発であったのに対して、平成の教育改革では、宇宙に対する研究開発が中心目標となってきたのである。こうした研究もキリスト教による道德教育が徹底して、家庭生活や社会生活がキリスト教の道德教育によって秩序づけられた場合に、一段と成果が挙げられることは改めていうまでもないところである。

5. 平成の教育改革と香川の教育的基盤

これまで述べてきたところから明らかなように、平成の教育改革が目指す教育目的は、一つは西欧諸国と同様にヒューマニズムの教育によって知識を開発して科学・技術・文化の進歩を図り現世の生活を快適にすることであり、いま一つはキリスト教の道德教育によって自己と社会と文化を道徳的に支配し、平和な社会生活や国家生活を営む人間形成をすることである。こうした平成の教育改革の推進に対して、香川の教育的基盤はどの程度の貢献が可能であろうか。香川の教育的基盤というものを考察してみると、次のような諸点で相当大きな貢献が可能であると思われるのである。

(1) 西欧的乾燥風土

既述してきたように、工業化社会は西欧のような乾燥風土地域の住民の高い知性によって産み出された社会である。香川県は四国の東北部に位置するとともに瀬戸内海に面している。風土的には日本は全体として高温湿潤なモンスーン風土に属するのにも、香川県は例外的ともいえる気候風土を有している。夏期の少雨・水不足は香川県風土の特色である。昔から繰り返されてきた大干魃に対応して、県内には溜池が2万も造られているし、近世以降は逆にこの気候を利用して塩田製塩業が発展した歴史を持つ。「高松砂漠」と言われた昭和48年（1973）の水不足を契機に香川用水を造って隣県から吉野川の水を導入したので、水不足の問題は解消したが、夏の少雨と熱帯並みの高い気温は今日も香川の風土の特色となっている。瀬戸内海にある香川県の小豆島には日本では珍しいオリーブの木が栽培

されていて、西欧のギリシャを始めとする地中海沿岸地域と同様に雨量が少なく、夏は高温乾燥の気候と風土を特色としている。こうした点から考察すると、瀬戸内海に臨む他の沿岸諸県も多かれ少なかれ香川県と同様に、西欧の乾燥風土型の気候であるといえるのではないだろうか。

前の第一論文でも参考にしたように、山内得立氏によると、雨量の少ない乾燥砂漠風土ではオアシスへ行くのに迂回を許されないので、直線的な思考態度であるという。ロゴスの論理が発達するという乾燥風土の砂漠地帯では、思考に精密さがないとたちまち死がやってくるからである。このために乾燥風土の住民は、ロゴス的な知性に富んだ性格が形成されると考えられている。乾燥風土の住民の知的優秀性については、このほかに前にも述べたように、筆者自身は次のような原因も考えている。モンスーン風土では人びとが土地に定着して地縁・血縁の集団をつくり、村の人びとは集団の和を何よりも尊重するために、自分の正しいと思う意見や優れた意見を出さずに集団に情意的に同調することのみに力を注ぐので、各個人の知性は発達しない。それに対して西欧など乾燥風土の住民は、同一地域に拘束されずに牧草を求めて新しい土地に移動するので、個人の知識や行動が重要となり知性を磨くことに力を入れる。そのため自ずから知的な個人主義の社会となっていくのである。どちらにしても、乾燥風土の住民が知的であることは事実である。

平賀源内を生んだ地域

乾燥風土の香川県では、個人の自由な活動が圧迫されていた徳川時代の中期に、他県に例を見ないような博学多才で知性の優れた科学者であった平賀源内が活躍している。彼は高松藩の足軽の家に生まれたが、25歳のとき長崎に遊学し、その後江戸に出てエレキテル（摩擦静電気発生装置）や寒暖計を制作した。晩年罪を犯して獄中で病死したが、それは当時の封建的な古い集団主義社会と道徳的に相容れなかったのが最大の原因と思われる。源内がもしも今日の工業化都市化社会に生まれていたら、時代の寵児として社会をリードする存在となっていたであろう。

(2) 学力日本一の歴史

文部省が行った標準学力調査で、香川県の小中学校は、昭和31年（1956）から

39年（1964）まで共に全国第一位で、昭和40年度（1965）、41年度（1966）では愛媛とトップを分かち合って終了した輝かしい歴史を有している。香川県が全国第一位の栄誉を獲得した原因について一般に言われていることは、次の二つのことに集約できる。一つは、県教委が新教育になってから子どもの基礎学力が低下してきたという県民の批判に応えるために独自の学力調査を行ったところ、島嶼部などへき地の学校の子どもの学力が目立って低いことを発見し、それまでへき地の学校に新採用の未経験な教員を配置していた従来のやり方を改めて、優秀で経験豊富な教員を配置するようにしたことである。筆者が一泊二日で指導に行った与島小学校等では活発な若い校長であったし、校長の妻は同じ学校の教師を務め一人娘は小3として在学しており、一家を挙げてへき地教育に貢献していた。二つは、へき地教育研究会を頻繁に開催してへき地の子どもたちの学力向上に努めたことである。

以上の二つに、さらに筆者の持論を取って加えて説明してみると、香川県は日本でも突出した西欧同様の乾燥風土の地域で、昔から水不足のため農業生産や日常生活面で不便を強いられ苦しめられてきたのであるが、その反面子どもも教師も知性と努力心が他の県の人よりも多く備わって鍛えられてきたものと考えらるのである。

（3）西欧的三大教育思想を体現した歴史的先覚者の存在

香川県の歴史には幸いなことに、平成の教育改革が必要とするギリシャ的ヒューマニズムの知育と宗教的徳教との三大思想を体現した偉大な先覚者が存在している。その一人は平安時代に活躍した空海であり、他は第二次大戦の頃に活躍した東大総長の南原繁である。

① 空海

空海は知的教養の面では万能で、詩文に優れていたほか書道でも三筆の一人であった。こうした点は本場の中国でも認められていたようで、師の恵果の葬儀のあと大勢の弟子たちを代表して、空海が墓の碑文を書くという栄誉に浴したという。今日の工業化都市化の時代では、科学的工学的ロゴスの知識や技術が重視されるが、空海はこの方面の知識にも長じていたようである。讃岐に今も存在する

日本一大きい溜池の満濃池は、天平宝子8年（764）朝廷からの使いを受けて空海が築いた池である。ところが弘仁9年（818）に決壊し地元では修築不可能の状態になったという。朝廷は人を遣わして修理させたがうまくいかず、遂に空海に修築工事の命が出され、無事に修理完了となったという経緯がある。空海は堤防の強度を高める新しい工法を用いた結果、池の内側にも湾曲したアーチ型堤防を造ったのである。この一事でもわかるように、空海は今日の社会が要求する科学的なロゴスの知識にも長じていた偉大な先覚者であった。

このように知性の面で万能の才能を備えていた空海であったが、宗教的・道徳性の面でも平安時代随一の高僧であった。青年期には、入学した高級官僚の養成を目的とした京都の大学を退学し仏教的山林修行を始めて四国の大滝山や室戸崎などで修行を積んだ。その過程で出会った大日教信者の影響で密教を信じるようになった。そして31歳のとき人生第二の転機が訪れた。遣唐使に従って当時の先進文明国であった唐に留学し、長安の青龍寺の僧、惠果について密教を学び帰国したのである。

竹内信夫氏によると、密教はインドから伝わった唐の仏教の中では一番新しい仏教で、空海はそれを持ち帰り、奈良時代以来の古い律令体制の日本の社会に新しい文化と思想を伝えたのである。当時の日本社会は、新しい時代への移行期にあった明治維新の時代とよく似ており、欧化思想を採り入れることで教育改革に貢献した明治の先覚者と同じ役割を、遙か昔の平安時代に空海が果たしていたことになる。

真言宗の教義はキリスト教に似たところがあり、例えば曼荼羅の中央に描かれているビルシャナ（太陽や星）は、マクロ的には宇宙であるが、ミクロ的には私たちの心であると考えられる。宇宙を象徴するビルシャナと私たちの心とは互いに渉入し、深く結ばれている。したがって各個人は孤独な存在ではなくて、それぞれに普遍的な世界に結ばれていると考えるのである。四国遍路の「同行二人」の信仰心もここから発したものである。キリスト教でも宇宙を創造した超越神がわれわれ各自の心の中に内在して、聖霊となって私たちに指導監督してくださると考えるので、キリスト教の教えと大変似たところがあるように思われる。また空海はその著書『三教指帰』の中で儒教と道教を、どちらも他人の救済に関心が少ないとして非難し、仏教を三教の最上位に置いている。さらに空海の人生の後半期

には、貧しい庶民のための学校として綜芸種智院^{しゆ}を創設した。このように空海の真言宗には、キリスト教が重視する隣人愛の精神が濃厚である。大正時代までは町や村の家を一軒ごとに巡礼して歩く四国遍路さんをよく見かけたが、お米や銅貨を差し上げる家が少なくなかった。これも弘法大師が信奉する真言密教の教えである慈悲心のお陰であったと思われる。

② 南原繁

香川県の引田町出身で東京帝国大学の政治学科に学び、卒業後同大学法学部の助教授となった後昭和20年（1945）に東京大学総長となった。南原先生が終戦に際して連合国との講和条約締結に日本国のために身を賭して尽くされたことはよく知られている。『聞き書南原繁回顧録』によると、南原氏は、自分が正しいと信じて実行している生活信条について次のように述べている。

「私の関心は、絶えず学問的にはギリシャとドイツの理想主義哲学、そして表面には出さなかったけれども、その背景には一つの精神、主張としてキリスト教があった。それは私にとって大事な隠れた一つのものです」（東京大学出版会、1989年、150頁）。

筆者は西洋教育史を読んでいて、ヒューマニズムの知育とキリスト教の道徳教育が人間形成上重要であることを知識や理論として理解し、そうした主旨の論文を書いてきていたが、『聞き書南原繁回顧録』を読んで自分のこれまでの持論が立証された思いを強くし、南原先生に対する敬慕の念を一層深めた次第である。南原先生がキリスト教の信者になったのは、熱心な仏教信者であった母親の影響によるということである。こうした点から考えると親が信仰心を持たない無神論者の場合が、教育上では一番問題があるように思われるのである。

(4) 西欧的・二大教育目的を分かち持つ二種類の大学の共存

香川県の面積は、大阪府に次いで全国でも二番目に小さい県である。この小さい県に幸いなことにヒューマニズムの教育（知育）を特色とする香川大学とキリスト教の教育（徳育）を特色とする四国学院大学との二つの大学が共存していることは、平成の教育改革を推進する上で、極めて有利な教育環境を形成しているといえるのである。

① 香川大学

香川大学が分担する知育に関連してすぐ想起されるのは、昭和31年から39年までの小中学校学力日本一への香大教育学部の貢献である。創土社発行の『新香川風土記』では、県教育委員会が実施した児童生徒の基礎学力調査とそれに基づくへき地教員人事の改革が、学力日本一の最大の原因であると述べている。この調査によって島嶼部の学力の低いことがわかり、従来新採用で未経験の教員を配置していた教員人事を改め、都市交流広域人事によって優秀でしかも教育経験の豊かな教員を島嶼部に配置するようにした。それに加えて当時のへき地教員の熱心かつ献身的な勤務があって、学力日本一という輝かしい成果が得られたことを忘れてはならない。言うまでもなく当時の課長以下の県教委のスタッフおよびへき地校の教員は、殆どが香川大学とその前身である香川師範の卒業生である。したがって学力日本一の栄光の裏には、香川大学教育学部とその前身である香川師範の功績が筆者には垣間見えるのである。

香川大学が分担する知育に関して、最近各方面から注目されているのは、工学部研究室が開発した超小型人工衛星「KUKAI」（空海）が2009年1月23日に宇宙へ飛び立ったニュースである。前にも述べたように、世界各国間で知育面わけてもロゴスの教育に関する今日の激しい競争が巻き起こされた発端となったのが、1957年のソヴィエトによるスプートニクの打ち上げ成功であった。したがってこの度の人工衛星「KUKAI」の制作飛翔は、香川大学も世界の知育競争の真っ只中に参入したことになり、知育の推進という面での香大の果たした日本社会への影響は計り知れないといっても決して過言ではないと思われる。

② 四国学院大学

四国学院大学は、1949年にアメリカ南部長老教会の宣教師と日本人キリスト者によって、福音主義キリスト教信仰に立つ高等教育機関として設立された大学である。このため学則第一条には教育目的として「神と人とに奉仕する人材の育成を目的とする」と述べられていて、キリスト教による道徳教育を行う大学であることを明言している。

ところで今日の日本の社会では自己中心主義の人間が横行し、非道徳な行為が平然と行われる時代となってきた。こうした社会的背景のもとに小学校では学級崩壊、中学・高校さらに大学までもが授業崩壊現象に悩まされるという、ま

ことに嘆かわしい教育多難の時代である。こうした日本の教育現場の動向に対して、教師がどのように立ち向かい指導していくかは、どの学校においても避けることのできない焦眉の問題である。幸いにも四国学院大学キリスト教教育研究所が編集した『大学とキリスト教教育』という出版書の中に、キリスト教信仰に立つ大学の教師としての道徳性指導に関する優れた実践記録が掲載されている。キリスト教主義の大学における徳育指導の一端を知るうえでまことに有効な書物であると考え一読をお薦めする次第である。

(5) 結び

以上述べてきたように、香川県は風土的には日本的モンスーン風土に属しながら、瀬戸内海沿岸諸県と同様に地中海沿岸地帯の西欧的乾燥風土に類似している地域である。そのうえに香川県は、西欧的知育と徳育を兼備した歴史上の人物をも輩出している誇り高い県でもある。筆者は、この香川県は小県ながらも日本の教育改革をリードする条件を十分備えていると、僭越ながら愚考する次第である。

あとがき

本稿の執筆を思い立ったものの、何ぶんにも高齢（現在98歳7ヶ月）の身であるので、果たして完成させることができるかどうか疑問を抱きながらの執筆作業であった。幸いにもここに上梓することができ、まずは神のご加護に深く感謝申し上げる次第である。

神への信仰心と高松新生教会における奉仕活動への参加の意志が、今回の執筆に際しても根本的な動機となった。ここに前任牧師の西原孝至先生ご夫妻および後任牧師の小野淳子先生の信仰心に関するご指導、さらに教会員皆さまのご支援を厚く感謝する次第である。

今日、高齢の身でありながらも何とか体調を維持して執筆を続けられたのは、臨床的には形見医院の形見先生によるご適切かつ誠意に満ちた健康指導のお陰であり、ここに改めて深く謝意を表しておきたい。

本稿の出版に関しては、多くの方々にお世話になったが、中でも『論集』への

寄稿に関して一貫していろいろと仲介の労を取ってくださった教会役員の三好一弘氏（元四国学院大学法人事務部長）および掲載について快諾してくださった池内功教授（四国学院文化学会論集発行責任者）に深く感謝いたす次第である。

さらに本稿執筆の始めから温かく見守り続けてくれ、陰に陽に心の支えとなって応援してくれている香川大学および四国学院大学の稲井ゼミ卒業生のメンバーの皆さま（会長の川田豊弘氏を始めとする稲穂会の方々）の励ましに対して、併せて衷心からの御礼を述べておきたい。

なお、文章表現・校正などに関する助言および原稿の打ち込みを娘の池田邦子が担当してくれたことに付け加えて、ひ孫の裕貴の健やかな成長を願い、本論稿のあとがきとさせていただきます。

2009年7月3日

参考文献

- (1) 稲垣真美『空海』徳間書店、1984。
- (2) 教師養成研究会『近代教育史』学芸図書、1962。
- (3) キリスト教教育研究所編『大学とキリスト教教育』新教出版社、2005。
- (4) 新香川風土記刊行会編『新香川風土記』創土社、1982。
- (5) 頼富本宏『平安のマルチ文化人』日本放送協会、2005。
- (6) 竹内信夫『空海入門』筑摩書房、1997。
- (7) 平塚益徳『平塚益徳講演集Ⅰ』真珠社、1984。
- (8) 山内得立『ロゴスとレンマ』岩波書店、1994。
- (9) 山田栄 他共編、増補『新西洋教育史』協同出版K, K. 1974。